

## 5 暮らしと民家

松河戸遺跡の環濠集落から当時の竪穴住宅跡が見つかっています。

原始生活の土間の生活から床が設けられ、土間で働き、床で休む場が生まれました。

農家の家の特徴は、土間で縄をなったり、屋根裏で蚕をかうなど、住居と生業の結びつきが強くありました。

また、冠婚葬祭においても、家の中で行われていました。

この様な用途で使われていた四間(よんま)形式が農村の民家の完成形といわれています。

区画整理によって農地はなくなり、昔ながらのこの様な農家も少なくなりましたが、住居と農業の結びつきが強く、水害と闘ってきた松河戸の民家についてみてみます。

- (1) 松河戸の集落・家並…………… p170
- (2) 松河戸の民家 …………… p171
  - ① 屋敷、② 附属舎、③ 構造間取り、④ 戦前の食事、⑤ 普請
- (3) 戦後の増改築ブームと区画整理後 …………… p178
  - ① 増改築ブーム、② 蠅(ハエ)のいた生活 ③ 区画整理後の民家



松河戸文化科学探求隊  
 隊長 長谷川 浩  
 080-3657-7052  
 松河戸町の沿革ホームページ  
<http://matsukawado.com/>

## (1) 松河戸の集落・家並

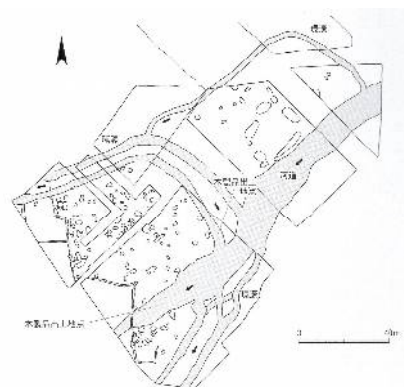
松河戸の集落は庄内川の沖積氾濫原にあり、自然堤防や微高地を利用して、そのかたまり単位を「島」と呼んで、島ごとに神社もあり、島は村の中の最小自治組織として古くから存在してきました。

区画整理が行われる前は、家屋が接近密集した6つの島(後に5つの島)から成り立っており、民家は、河戸と村中に集中していました。

区画整理が行われる際、松河戸北部で発掘調査が行われました。この安賀地区にある松河戸遺跡からは、縄文時代の終わりから弥生時代前期と、鎌倉・室町時代の複合集落跡が発見されています。

この標高 14m 前後の微高地(自然堤防上)には稲作農耕が日本に伝わってきた段階での「環濠集落」(南北 180m、東西 120m)が確認され、稲作農耕に使われる「くわ」など米作りの木製の農具や土器などが多量に出土しています。

そこからは、弥生時代前期(紀元前 2 世紀頃)ごろ、稲作が盛んに行われていた様子がみられます



弥生時代前期 環濠集落の遺構

環濠といえば、「防御施設」をイメージさせますが、松河戸の環濠は、南側が開放上になっていることから、防御施設というよりは「水利施設」としての治水、水害対策を意図したものといわれており、弥生時代のこの環濠集落は春日井市内でははじめての発見でした。

また、江戸時代のムラ絵図をみると、氾濫時の水流を防ぐため、上手には高さ 1~2m の「ヨゲ提」と呼ばれる土手を、また下手には村中の水を排水するヨゲ提(霞提)を構築していました。

【参照 p135 3暮らしと川 (2)治水対策 ②住民による治水対策】

区画整理により、南北、東西の真っ直ぐな道路で仕切られて、多くの家は真南向きに建っていますが、区画整理前の図面、写真をみると松河戸の家の多くは、真南ではなく少し西側を向いていました。

これには「家は斜に構えろ」という先人たちの教えがあったように聞いています。

①真夏の直射日光を避ける。②北側の壁にも日光をあて、カビ・こけを防ぐ。③風水の吉、凶の問題などが理由と思われますが、特に松河戸の場合は④強い風雨を防ぐ、⑥氾濫時の水流を防ぐためと考えられており、この地に住んでいた先人たちの長年の経験からくるものと思われます。



江戸時代のムラ絵図 (p155)の略図



昭和 22 年の集落・家並

主要道路が出来ただけで、家並は江戸時代からほとんど変化していません。



平成 8 年の集落・家並

区画整理工事が一部始まっています。

## (2) 松河戸の民家

### ① 屋敷

松河戸は昔から水害に悩まされた所で、古くからの民家は、自然堤防の微高地(水田より1m~1.5m位高い)に盛土をし、地盤を高めて建物を構えていました。

特に母屋の背後、北西の方向に建てる土蔵は、石垣を築き、水屋の構えにした家がみられ、この水屋の石垣の高さは、堤防の高さ(以前の堤防の高さ)と同じにしており、垣を築く際に用いられる石は、庄内川や木曾川の玉石が多く使われました。

一般に農家の屋敷は広く、自作農では1,000平方メートル前後が普通でした。それは屋敷が生活の場であると同時に、生産の場としても使われていたからです。

また多くの家の周りに竹やぶがありました。これは一揆や戦乱から家を守るためだったといいますが、竹が農家にとって用途が広く、また冬の季節風を防ぐ役目をしていたからと思われます。

家のオトグチ(玄関)は、辰巳からやや南よりにあり、そこから小路が屋敷の入り口へ伸び、そして、公的空間である街道・往還へつながっていました。母屋の前庭は平らな空間で「カド」といって、「むしろ」を敷いて干干しや子どもの遊び場など多様に使われていました。

軒下やカドを通して隣接する家を結ぶ「経路」は、日常的に使われており、往還へ出なくても直ぐ行ける通路として、ちょっとした用事や急ぐときには便利でした。ただ、この通路に対する固有の呼称は伝わってないようです。

一般に屋敷は四角になりますが、ところによっては、わざわざ鬼門や裏鬼門にあたる隅を切って、角をなくしているところもありました。ここが張り出していると病難が絶えなかったり、女の権力が強くなるからともいわれていました。

裏側は竹やぶの竹をそのまま折り曲げて、縄で結わえて垣根をつくり、前の方は樹木を植えたり、生垣をつくったりしますが、氏神さまがきらわれるとか家が繁栄しないとかいって、生垣や塀をつくらない家もありました。

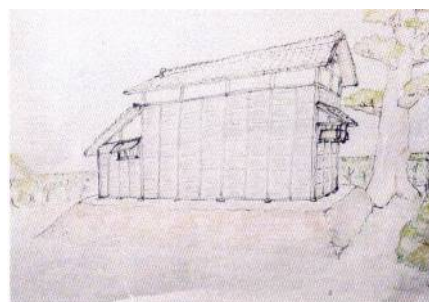
屋敷には植えてよい木と忌みきらう木があり、「表はカシ、裏はカリン」というし、松は縁起はよいが、「裏松はいいことなし」ともいいます。

ビワ・ブドウは七難木、ソテツは四化花(しかばな)、センダは死人の杖などといっていずれもきらっていました。

屋敷の入口はショウジ(小路)といい、オトグチ(玄関)からみて、辰巳からやや南よりを吉とし、鬼門の丑寅は病難が絶えない、裏鬼門の未申も家が繁栄しないといってきたらいました。



▲蔵の石積と生活道路



▲水屋 平成15年頃まで松河戸町河戸地内の長谷川兼光氏の屋敷に保存されていた。スケッチは兼光氏による。(欄に描かれたものは出水時に使う舟)





## ② 附属舎

母屋の入口は原則として東南側に設け、屋敷の周りは小屋、灰屋、便所、井戸、風呂など附属舎を巡らしていました。

通常、小屋は母屋の南で前庭(カド)を挟んで建ち、灰屋や便所は母屋の東側で入り口の小路に接して建てられていました。

長屋門、土蔵、離れ座敷を持つ家は、大地主など少数でした。

小屋は「コウエ」などと呼び、南正面にある子家のことで、生活権を持つ者が母屋に住むのに対し、息子夫婦が跡を継ぐまでの間の住居であり、床のある部屋と土間と続きになっていることが多く、生活と農作業とに兼用されていました。

灰屋は「ハンヤ」などと呼び、灰土や堆肥を積み、農具などを置いていました。

便所は「セッチン」などと呼び、外便所くみ取りが普通で、それを肥料としていました。

井戸屋形はカドのやや東寄り、本柱からみて南東にあるのを吉としました。

井戸の水神信仰は根深く、ここでも正月には門松を立て、鏡餅を供え灯明を上げることを忘れません。

何かの都合で埋める場合にも、神官をよんで祈祷をし、節を抜いた竹を差しこんで、井戸神の息ができるようにとの心遣いでした。

松河戸の井戸はそぶ水が多かったため、瓶に小石・砂を入れ、その上に杉の葉をのせて水をこしていました。

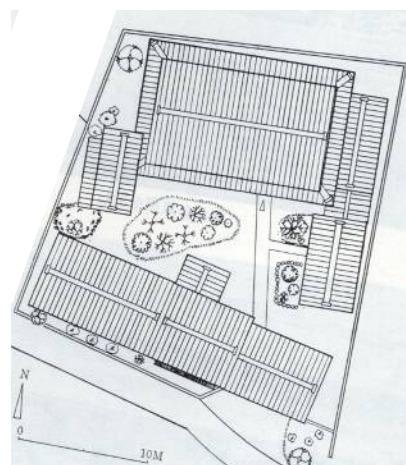
風呂も外風呂が多く、焚き物の用意や、昭和34年簡易水道が供給されるまでは井戸からの水汲みが大変でした。

一般には、鬼門に井戸や便所、風呂場をつくることを忌みきらい、戌亥が一番警戒すべき方角とされ、ここに産土神や先祖神の小祠を設けている例は、部落の古い家で多く見受けられました。



↑  
かど(庭)  
農作業や子どもの遊び場など多様に使われていた。  
写真(戦前)は正月の門松が立てられている。

←  
井戸と便所  
昭和40年頃までは、外井戸、外風呂、外便所であった。  
写真(戦前)は正月の門松が立てられている。



区画整理前の松河戸の農家の一般的な配置  
カド(庭)には庭木が植えられている。  
家の向きは、真南ではなく、少し西側を向いている。

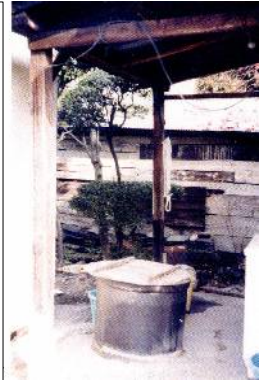


灰屋と肥溜

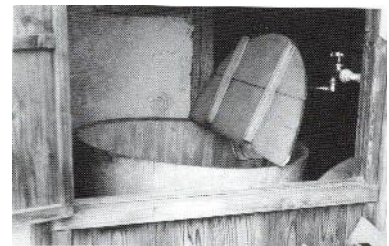
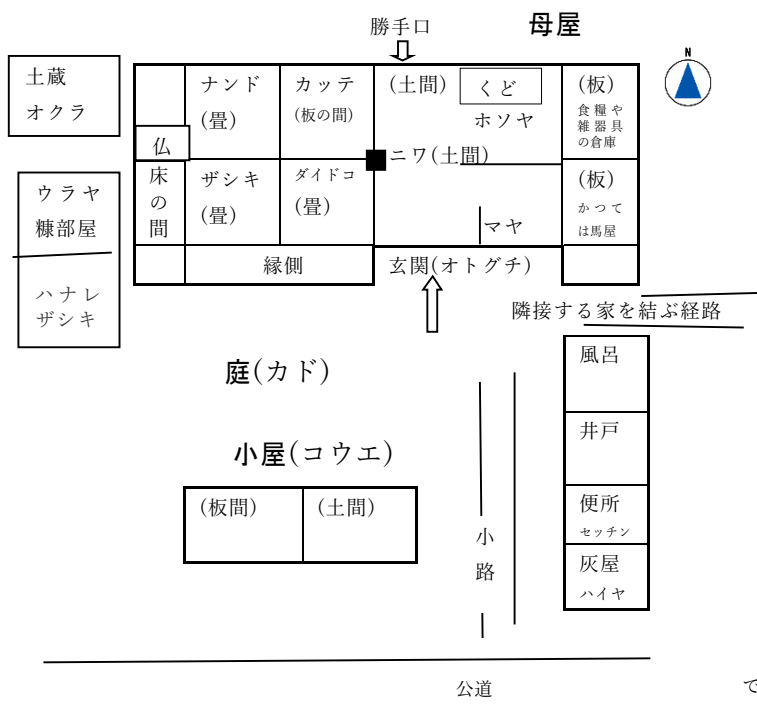


← こし瓶はんど  
松河戸の井戸はそぶ水が多かったので、瓶に小石・砂を入れ、その上に杉の葉をのせて水をこしていた。

つるべ井戸 →  
昭和 34 年に簡易水道が供給されるまで飲料水の水源は井戸であった。



戦前の自作農の一般的な民家(四間)



風呂場  
焚き物の用意や、昭和 34 年に簡易水道が供給されるまで水汲みが大変だった



井戸屋形と風呂場  
昭和 40 年頃までは、外井戸、外風呂、外便所であった。



▲蔵の入口

松河戸の土蔵

松河戸の屋敷を北側からみると、高く石垣を積んだ上に建てられた土蔵が目立っていた。  
これは、水害に備えた水屋の構えを示していた。  
オクラは戌亥の方向をもって吉とした。



旧 長谷川新一家土蔵



旧 長谷川千秋家土蔵



旧 長谷川勇一家土蔵



## ③ 構造間取り

## ① 構造

松河戸遺跡の環濠集落跡から「**竪穴住居**」跡が、また、鎌倉・室町時代の「**掘立柱建築**」の痕跡がみられました。

「竪穴住居」は、右の復元推定図のように、4本の柱を建てて屋根をかけた構造をしていたものと推定されます。

鎌倉・室町時代の「掘立柱建築」その後、基礎石の上に柱が立てられますが、明治のころの農家の母屋の構造形式のほとんどが「**四つ建て**」といわれるものでした。

「四つ建て」は、母屋の中心となる部屋のまわりに、四本の太目の柱を建て、それを基本として家を造る建築方法で、明治初期の普通の農家の母屋（住まい）でした。

右の写真は、中央公民館に移築されたもので、間取りは、「**カッテ**」（だいどころ、居間）、「**ダイ**」（客間）、「**ナンド**」（寝室）からなる三間取りになっており、その後の田の字に4つの部屋を造る間取り「**四間**」の原型ともなっています。

なお、この「四つ建て」型式は明治初年までで、以後は母屋の中心に建てられた大黒柱を基本として家を支える構造の「**中大黒造り**」に変わっていきます。



明治初期における大黒柱と大材による上部架構

旧長谷川清家(松河戸)

屋根材は、一般に「**草屋根**」というように屋根の葺材は古くは萱(かや)でしたが、開拓が進み萱が少なくなると麦カラがこれにとって代わり、それも葺師が居なくなった昭和10年代の後半には、長持ちのするトタン葺きに変わっていきました。「中大黒造り」になるとほとんどが瓦屋根となりました。

## ② 間取り

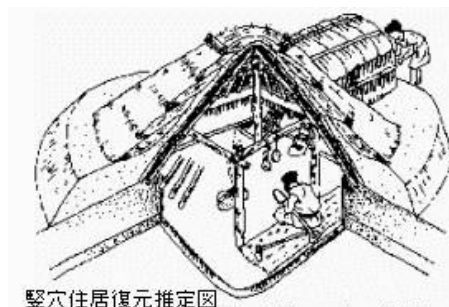
農村の民家平面の基本形式は「**四間形式**」で、農家の完成形ともいわれていますが、その発展変遷も松河戸遺跡の環濠集落にみられる竪穴住居から始まります。

竪穴住居は土間の生活でしたが、この土間に床が設けられて、土間に床の生活が始まり、やがて床の部は2つに分割せられ二間平面の生活となって、つづいて三間形式から四間形式となっていきます。

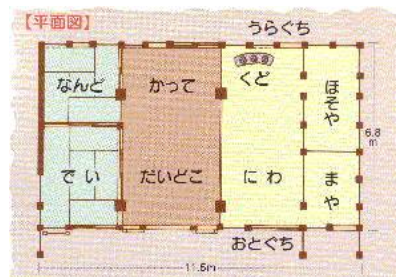
これは、土間で働き、床で休む(睡眠と食事)の生活から、「**睡眠の場**」と「**食事の場**」に2区分され、その後「**休憩の場**」が設けられました。土間が広いのは原始社会住居の名残りとおもわれます。

「四間」の母屋の間取りは平入で、東側に土間を持ち、西側の床のある部分は一般に四間取りが多く、田の字型の平面(四間)を持っていました。

南側に八畳二間、北側に八畳か六畳二間の例が多くありました。



竪穴住居復元推定図



明治の初期に多くみられた「四つ建て」

明治初年(1868)ごろ勝川町に建てられたもので、昭和53年(1978)に中央公民館に移築した。

本来は草葺き屋根でしたが、防火上の問題からトタン葺きに替えられている。

東側の「ニワ」と呼んでいる土間は、玄関土間、作業場や食料兼雑器具の置き場でありました。

土間の奥(北側)には「カマド」(クド)があり、昔は赤土にワラズサを混ぜてこね、三日月型に大中小3つ並べてつくるのが普通でした。ここに荒神さまがおられるという信仰は深く、正月にはお鏡餅を供えました。

その東側にある「カッテ」では食事の場となっていました。

土間の南側は農耕馬を持っている家は「馬屋」に充てていましたが、時代が下がると、そこに接待用の部屋(応接間)を造る家も現れました。

その西側の部屋「ダイドコ」は、呼び名は様々ですが、来訪者と面談用談したり家族の休憩の場でもありました。

その西側の「ザシキ」は床の間を設けており、氏神の祭典・法要・遠来の客に当てる場で特別の部屋として使いました。多くの人が多く集まる際は、田の字型の四間の「ザシキ」、「ナンド」、「カッテ」、「ダイドコ」の戸やふすまを開け放して部屋を広く使うことができました。

床の間や障子戸などに細かな細工を施すのは比較的新しい家で、古い民家は座敷飾りなどないのが普通でした。

「ナンド」には仏壇が置かれ、家族の寝室となっていました。

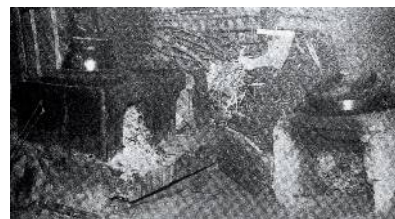
「縁側」は、近所付き合いに欠かせない場でした。明るく、暖かく、風通しも良いので、ちょっと腰を下ろし、気楽に長話できる格好の場であり、仕事場としても利用されました。外部に面する建具は、戸袋に収納され、風雨や夜間の時は締められました。その内側は古くは戸がなかったのですが、新しい家にはガラス戸などがはめられました。

「オトグチ」(玄関)の反対側にある「勝手口」は農家にとっては重宝なもので、畑仕事の合間の食事など玄関が汚れないように、またちょっとした出入りなどはオトグチを使わず、勝手口を使っていました。

農家の家の特徴は、土間で縄をなったり、屋根裏で蚕をかいなど、住居と生業の結びつきが強くあり、また冠婚葬祭や島の集会など、多くの来客に対応できるような構造になっていました。

家を建てることは、その家主の一生の大仕事となりますが、地元の大工にとっても継承されてきた技術の腕の見せ所でもありました。

松河戸の農家のほぼ全てが、この様な農家の完成形といわれる「四間」の家でしたが、区画整理により取壊されました。



右側「土くど」、左側漆喰で上塗りした「和くど」  
昭和10年代撮影



タイルを貼った「くど」 昭和30年代ころ  
戦後はこの様にタイルを貼ったものが増えた



多くの来客があるときは、  
戸やふすまを開け放して部  
屋を広く使った。

写真は、戦後の増改築ブ  
ーム以降に建てられた家



農家の屋根裏では蚕を飼っていた。



縁側は、農家の社交場であると共に仕事場



土間は農家の仕事場 (しめ縄作り昭和末期)

## ④ 戦前の食事

食事をする場所は、家長から順に家人はそれぞれの座が決まっていました。

## ●箱膳

食事をする膳は今のようなテーブルや座卓といった大きな食卓ではなく、箱膳という個人専用の膳を使っていました。

箱膳の中には茶碗2つ、皿2枚、湯呑茶碗、箸が入っており、食事の時は、箱の蓋を裏返して膳として使用し、食器をしまう容器と膳の両方の機能を備えていました。

箱膳の中の食器は食事ごとに洗うのではなく、月に2回、「つごも」と「中つごも」(月末と14日)に洗っていました。

## ●クド

食事を作る場は、「ニワ」といわれる土間で、ここに「クド」がありました。

クドは土クドで、おわんを伏せたような形で、普通3つの釜があり、1つは飯を炊く釜。もう1つは菜を煮る釜。その真ん中の〈捨てクド〉は火は燃やさず両側のクドの熱が回るようになって、湯を沸かす茶釜をかけるようになっていました。

## ●流し

流しは勝手から裏口を出た戸外にあり、昭和34年に簡易水道が供給されるまで、水は井戸から汲み上げていました。

## ●ハレの日、お祭りの食事

ふだんは粗食でしたが、婚礼、葬式、法事、正月、秋上げ、祭りなどハレの日の食事は精一杯のご馳走でした。自分達が食べるだけでなく、親戚、近所に配る分まで作りました。

れんこん、人参、ごぼう、こんにゃく、椎茸といった今ではごく普通の食品がハレの日のご馳走でした。

調味料は、たまり、酢、味噌が使われ、砂糖が農村の庶民の料理に登場するのは、昭和になってからで、それもごくまれに黒砂糖が使われていました。

動物性蛋白質は、いわし、さんま、ボラといった魚類と、自宅で飼われていた鶏肉でした。

## ●鯖ずし…春日井では祭りの日に「鯖ずし」を作った。(さばの1本づくり)

塩さばをもどして、すし飯を包み、竹皮に巻いて、それを柿の木や家の軒先に頭を下向きに縄で丁寧に縛り付けた。

縄をもってぐるぐると柱の周りを回るのは子供の仕事である。2、3日後に食べる。

1軒の家で何本も作り親戚に配った。

他に、あげずし、巻ずし、切りずしを作った。切りずしの具は、角ふ、れんこんなどを使った。

## ●ボタ餅…ハレの日の食べ物としてはボタ餅がある。10月の中の亥の日に〈刈り上げボタ餅〉を作った。

彼岸には、おはぎを作る。ボタ餅はモチ米ばかりであるが、おはぎはモチ、ウルチ半々である。

## ●餅……ハレの日に欠かせないのは「もち」である。「もち」は望月のモチであり、願い事の成就を意味する。ご馳走であると同時に庶民の希望と祈りが込められていた。

(正月の雑煮、お供えの鏡餅、出産、誕生、入学、婚礼、喜寿など祝い事や祭り事、時々の節目には、必ず餅が出た)

## ●年中行事の食事

正月、七草粥、節分、ひなまつり、端午の節句、七夕、盆、年越しなどの年中行事などに作る料理もそれぞれ工夫されていた。



さばずし一本作り



## ⑤ 普請

普請とは、「普く大衆に請う」ということで、道普請、川普請などということばもあるように家を建てるということは大変なことで、大工や左官だけでなく、村人や縁者の協力なくしてはとてできませんでした。「もやい」ということばは、今でも使われるが、お互いに力を貸し合う隣保扶助の精神は、昔ほど固かったようです。

建築儀礼を順を追ってみます。

## 1、タノミ

古い家のあるところでは、それを壊す前に、赤飯か餅を持って、「そのつもりだでたのむ」といって回る。

## 2 地祭り

神主をよんで行方。今と変らない。

## 3 手斧始(ちょうなはじめ)

日柄のよい日に、大工・左官・親類もよび、大工は材木に墨印を入れる。

## 4 ジギョウツキ(千本づき)

タコアシを使って土台石を置き柱を立てる準備の地固めで、一か所で何百回もついた。

## 5 建前・棟上げ

同時に行えないときは、日柄のよい日に「柱立て」だけをすます。戌亥も隅柱1本を立て、笹のついた青竹を結びつけ、これに新しく迎えてきたお札や縁起のよい末広・てんべつ・おさ・かせ・へなわなどを添えて結わえる。

建前・棟上げにあたっては、隣り近所は縄2把、竹・酒などを、親類は投げ餅、赤飯を普請見舞いといって持ちよる。

## 6 棟上げ式

建てた家の屋根に棚を組み、投げ餅を飾る。

棟にはご幣を立て、竹の弓に矢をつがえ、扇子を麻緒でしばり、矢は鬼門に向ける。新しいハンテンに着替えた棟梁は、まず四方の神を拝み、槌で棟木を打って家の魂を祝いこめる。親類の者は羽織・袴で神事に加わる。餅投げは、まず棟梁が四隅にスマモチを投げてから始まる。

自給自足の農家の普請は、大工や左官だけでなく、親類や近所の手伝いが必要だった。主な仕事は、家壊しと壁運びなどだった。

棟上げの時には、餅を投げて地域で祝った。棟梁が四隅に最も大きな蓋餅を投げて開始。手ぬぐい、5円玉や菓子などが今や遅しと待ちかまえた人たちに撒かれる。

今日では、この様な「餅投げ」の様子は見られなくなった。

## 7 祝宴

新しい家の中で、夜遅くまで、木遣り唄など唄って祝う。

## 8 ヤオツリ(屋移り)

すべて造作が終れば、日柄のよい日を選んで大工・親類をよび新しい家に引越す。主人が最初に入り、神仏を移す。隣り近所の人には、ウドンや赤飯、ところによっては石一つ入れたアズキガユを振舞う。女竹でつくった百膳の箸を、全部よごすのがよいとされる。

## 9 新築後の初のお日待や秋祭りの獅子宿をすと縁起がよい。

家の新築ばかりでなく、屋根の葺きかえも大変なことで、葺き終われば、「餅投げ」をして祝う家もあった。



柱立て



昭和47年頃 もち投げ  
棟梁が四隅に最も大きな蓋餅を投げて開始。手ぬぐい、5円玉や菓子などが今や遅しと待ちかまえた人たちに撒かれる。

### (3) 戦後の増改築ブームと区画整理後

#### ① 増改築ブーム

昭和になっても、戦前は明治・大正時代の間取りと大きな変化はありませんでしたが、戦後の高度成長期以降は、農業技術の進歩で生産生活が変わり家族労働を軽減させました。

また、人間関係も大きく変わり、住宅の基本条件である家族も、大家族から夫婦中心の家族となり、従来の家長制度もなくなっていきました。

生活様式が大きく変化し、居間にはテレビが置かれ、台所は電化され、農業技術の進歩で土間やかどの必要性がなくなりました。

1956年の経済白書が「もはや戦後ではない」と明記し戦後復興の終了を宣言して、白黒テレビ・洗濯機・冷蔵庫の家電3品目が『三種の神器』として喧伝されました。

大部屋で共有され、独立していなかった食室、寝室、応接室などや、子ども勉強部屋などの個人部屋も設けられるようになります。

昭和32年に都市ガスが導入されて土間には床が敷かれて台所がダイニングキッチン変わり、また、昭和34年の簡易水道、昭和44年の上水の供給により井戸や水瓶は使われなくなり、トイレや風呂は家の中に作られるようになっていきます。

右上図は昭和初期に建てられた農家の一般的な四間構造で、当時の松河戸の中学生が授業で描いた自分の家の間取図ですが、昭和40年頃になると、従来の間取りに、テレビ、冷蔵庫などの電化製品が入り、台所には水道が入り、都市ガスが供給されたことでくど(かまど)が使われなくなりました。

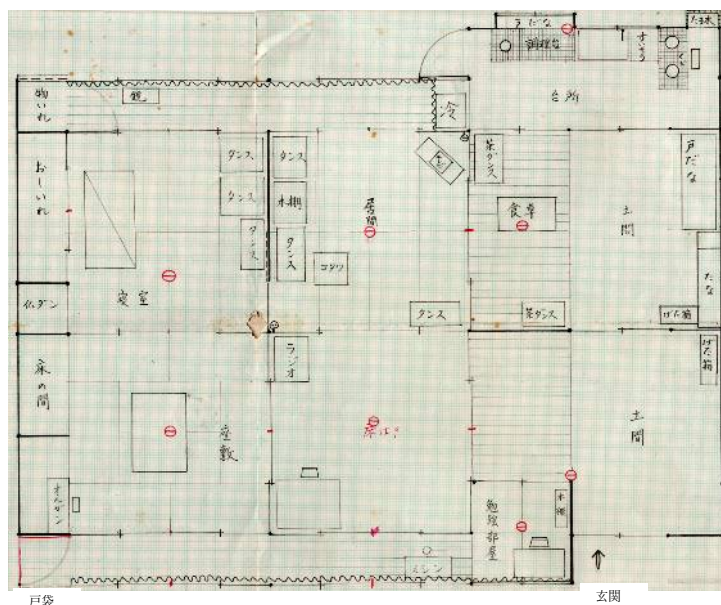
物置だった場所は子どもの勉強部屋としています。

お風呂、トイレ、井戸などは従来のまま屋敷の外の附属舎にありますが、水道が導入されたことで井戸には洗濯機が置かれます。

風呂の井戸からの水汲みの重労働はなくなりましたが、焚き物でくべていました。

トイレは依然くみ取り式で水洗トイレになるのは増改築ブーム以降になります。

その後、昭和40年～50年にかけて増改築ブームが起こります。



中学生が学校の授業で描いた家の間取図 昭和30年代後半

昔ながらの農家の四間造り(昭和5年建築)に、電化製品(テレビ、冷蔵庫)が置かれ、南側の良い所に子ども勉強部屋も設けられました。

1年後に北側の土間は、床が張られダイニングキッチンとなりました。

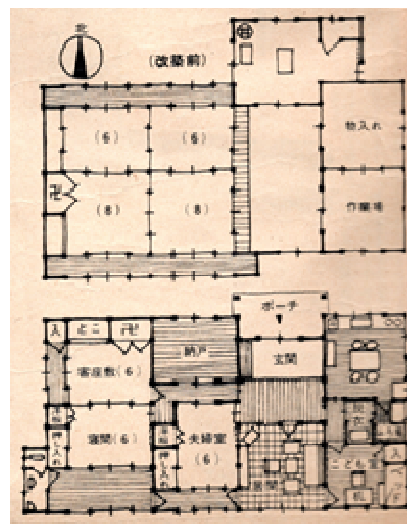


市広報 昭和42年12月1日

下の写真図は田の字型を解消し土間に床を張ってダイニングキッチンにし、玄関を北側に設けるなどの大改築が行われた例です。

古い家のわら屋根は、亜鉛鉄板(トタン)ふきの屋根に変えられ、新建材などが使われ、トイレには浄化槽が付けられ、風呂や台所にはガス湯沸かし器、ガス炊飯器などが設置され、屋根には温水器が置かれ、特に家の水回りは快適になりました。

多くの農家でこの様な増改築が盛んに行われました。



昭和40年代には、従来の四間の土間に床が張られ、ダイニングキッチンや応接間も作られるなど、増改築が盛んに行われました。部屋数は多くなり、用途ごとに細かく区切られました。

田の字型を解消し改築した例

この様に、戦後造られた農家の家は、従来の四間を基としながらも新しい和洋折衷の家がつけられるようになり、また従来の古い家も昭和40年代頃になると増改築が盛んに行われました。

また、昭和40年頃から籾乾燥機が使われるようになると、籾の日干しなど農作業に使われていた母屋の前庭の平らな空間(カド)も使われなくなり、そこには庭木が植えられ凝った庭つくる家も増えてきました。

## ② 蠅(ハエ)のいた生活

戦後の30年代まで、松河戸のどこの家にもハエがいました。

家の中を好むハエには、イエバエ・ヒメイエバエなどがおり、「五月蠅」と書いて「うるさい」と読むことがありますが、昔は初夏になると、食べ物を出しておくとすぐにハエがたかるので、「蠅たたき」は欠かせないものでした。

市販の蠅たたきもありましたが、農家の庭にはシュロの木を植えていたので、シュロの葉で作った自家製の蠅たたきも使っていました。



シュロの葉で蠅たたきをつくる。

「蠅帳」は、夏場に食べ物を保存し、ハエがたかるのを防ぐ戸棚で、風通しをよくするために、戸棚のまわりの板の部分に透ける布や網を張っており、この中に調理した食品や食べ残しを入れておきました。

また、蠅帳には、食卓の上にかぶせる4本足で傘のような折り畳み式のものもあり、明治・大正・



昭和中期まで、台所や食卓には欠かせないものでした。

「**蠅取り紙**」は、とまったハエを捕らえるために、粘着性のある薬品を塗った紙で、明治時代にアメリカやドイツからフライキャッチャーという名で輸入され、大正12年に国産化されました。

当所は平紙式のもので、キンバエやニクバエなど大型蠅の捕獲用でしたが、昭和30年代以降のごみや下水の処理方法の変化により、ヒメイエバエなど、ぶら下がったものとまる小型蠅が増えると、吊り下げ式の蠅取り紙が主流となりました。

一日吊り下げておくと、紙が見えなくなるほど蠅で真っ黒になったものです。

終戦後、アメリカから DDT が輸入されましたが、土地柄、蠅はなかなか減らず、やっと昭和40年代になると、松河戸でも次のような理由で家の中でハエの姿を見つけることは少なくなりました。

#### ○ 生活環境の変化

- ・家ごとに堆肥や家畜の餌などにされていた生ごみが、回収されて一括処理されるようになった。
- ・田畑の肥料が、下肥から金肥（化学肥料など）に変わっていった。

#### ○ 建物の変化

- ・汲み取り式の便所から水洗式のトイレになり、家庭で糞尿が蓄えられなくなった。
- ・通気性のある建物から密閉度の高い建物に変わってきた。

### ③ 区画整理後の民家

区画整理によって、住居と農業の結びつきはなくなり、多くの来客を迎えることもなくなったことから、区画整理以降、農家の象徴であった従来の「四間」の造りの家を建てる人はほぼなくなりました。

また、大家族の家は少なくなり、家長との考えもなくなったことから、家族・女性中心の間取りが主流となっています。

かつての農家では、区画整理で減歩されても敷地が広いいため、子ども世帯は親と同居ではまく、親世帯と同じ敷地内に戸建て住宅を建てて住むケースも多くみられます。

南側にキッチンが作られるようになり、LDK を仕切ることなく、仕切りをなるべくなくしたオープンな間取りが主流となり家族一体という間取りが増えていきました。

戦後の増改築ブームの頃は、部屋を用途ごとに細かく区切られ部屋数も多くなる傾向かありましたが、新しく建てられた家は、部屋数を絞ってリビングを広くしたり、仕切りをなくして回遊性を高める間取りなどが多くみられます。

松河戸には昔ながらの「四間」家が姿を消したようにみえますが、区画整理から逃れた昭和以前の古い家が今でも2~3件残っています。



道風公園線と松河戸西枇杷島線の交差点付近  
区画整理により、家並は大きく変わりました。  
南西の方面から、道風公園をみる。

松河戸文化科学探求隊  
隊長 長谷川 浩  
080-3657-7052  
松河戸町の沿革ホームページ  
<http://matsukawado.com/>